金印の出た土地
—北九州の歴史—

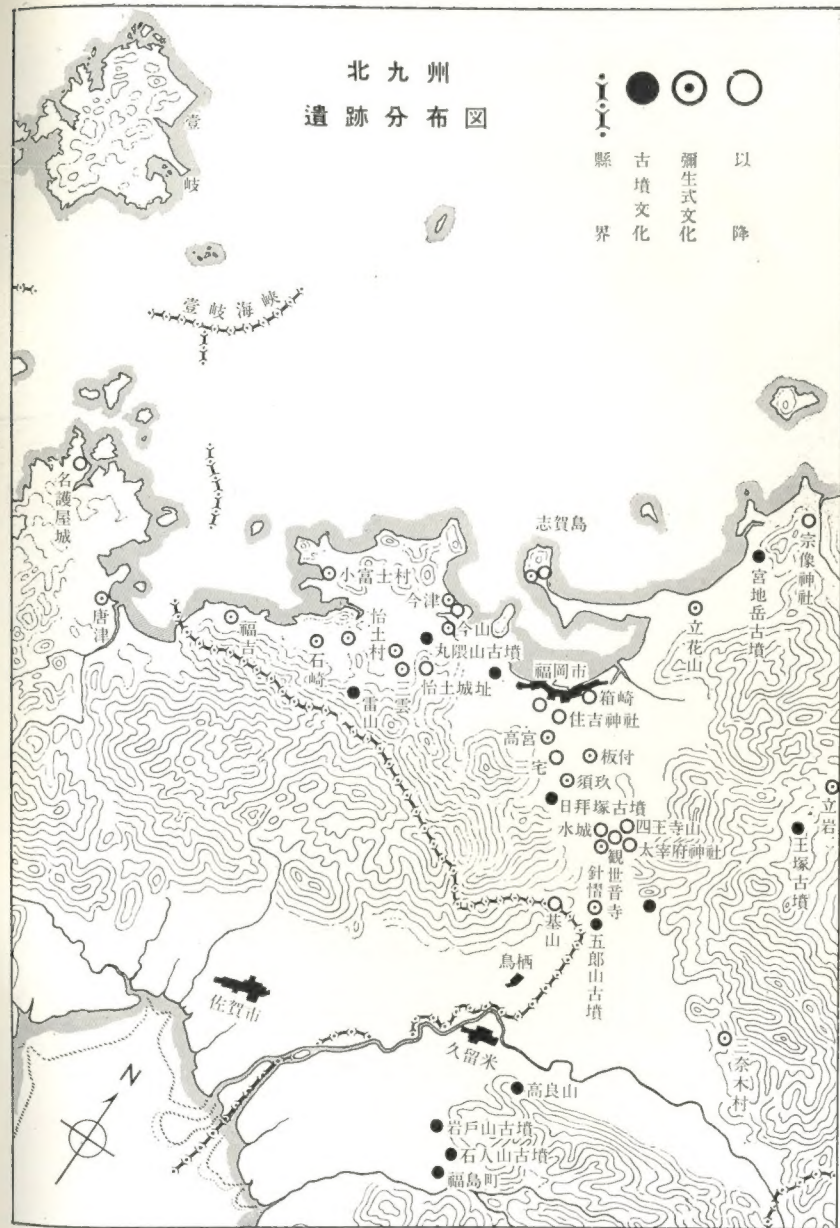
岩波写眞文庫 46

岩波写眞文庫 46 金印の出た土地

編集 岩波書店編集部 岩波映画製作所
写眞 西日本新聞社提供

長垂山より今山を望む.

皇室の先祖が九州、そこへ天降った人皇第一代の神武帝がこの地から東征の軍をおこした、と神話は傳えている。その九州のかがやかしい地位は、科学としての歴史の前には、すでにかげがうすくなってしまった。しかし、考古学や、古代社会の研究の発達は、北九州に再び貴重な價値をもたらした。地図を一見すれば、そこは大陸と日本列島とをむすぶ、唯一の門戸である。何千年の民族の生命をはぐくむ使命をになった最初の一粒の米も、おそらくはこのあたりに上陸した。石器や土器しか知らなかった私たちの祖先が初めて見る大陸の銅器や鉄器に驚嘆したのもこのあたりの海岸であったことだろう。美術も、工藝も、文学も、政治も、経済も、ここに東西交流の地点をみいだした。北九州の一角、博多湾に浮ぶ志賀島から発見された金印は、二千年前の大陸交通の記念品である。この地は大陸文物の攝取地であると共に、民族防衛の第一線でもあり、時には大陸併呑の夢に氣おった人々の拠点でもあった。「古代」も「中世」もここから導入されたように「近代」のおとずれも、この地にふかいえにしをもつ。

目 次

定価100円 1951年11月5日 第1刷発行 1955年9月20日 第5刷発行 発行者 岩波雄二郎 印刷者 米屋勇 印刷所 東京都港区芝浦2ノ1 半七写真印刷工業株式会社 製本所 永井製本所 発行所 東京都千代田区神田一ッ橋2ノ3 株式会社岩波書店

北九州
遺跡分布図

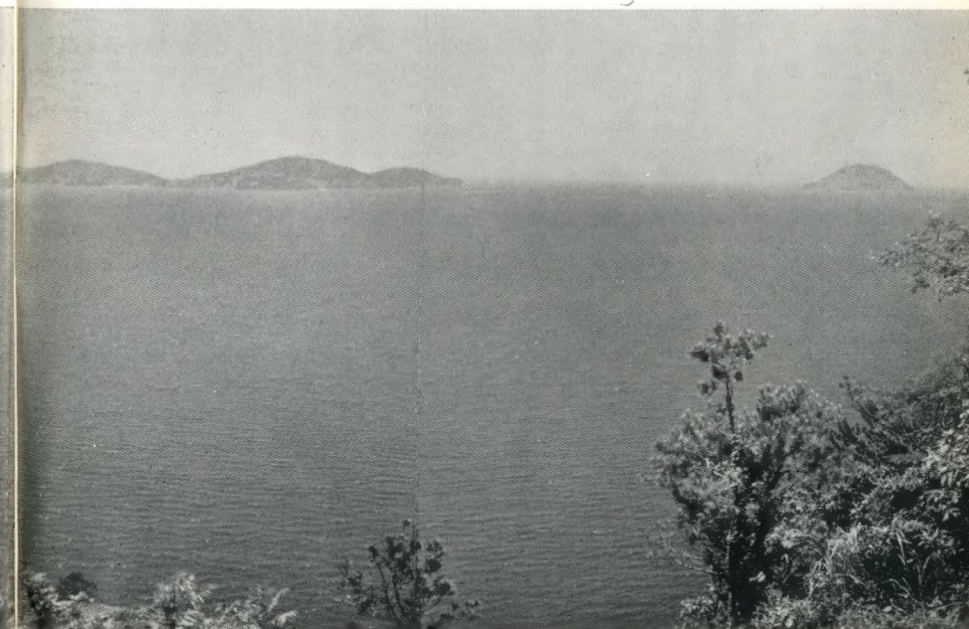
以降 彌生式文化 古墳文化 縣界

壹岐 壹岐海峡 名護屋城 唐津 福吉 小富士村 今津 今山 拾土村 石崎 雷山 三雲 丸隈山古墳 拾土城址 志賀島 福岡市 箱崎 住吉神社 高宮 三宅 板付 須玖 日拝塚古墳 水城 四王寺山 観世音寺 太宰府神社 針摺 基山 五郎山古墳 鳥栖 佐賀市 久留米 高良山 岩戸山古墳 石人山古墳 福島町 宗像神社 宮地岳古墳 立花山 立岩 王塚古墳 二奈木村

残の島より志賀島を望む

残の島より博多湾を望む

上は写真5枚，下は4枚をはりあわせたもの

志賀島，残の島，あるいは博多湾の海岸を通って2,000年の昔から，多くの大陸文化が輸入された．

鏡山より唐津湾を望む

宮地岳より玄海灘を望む

最初に北九州に渡ってきた文化は，唐津（昔の末盧）に上陸したのであろうか．玄海灘の荒海を通って博多(昔の奴)に入ったのであろうか．

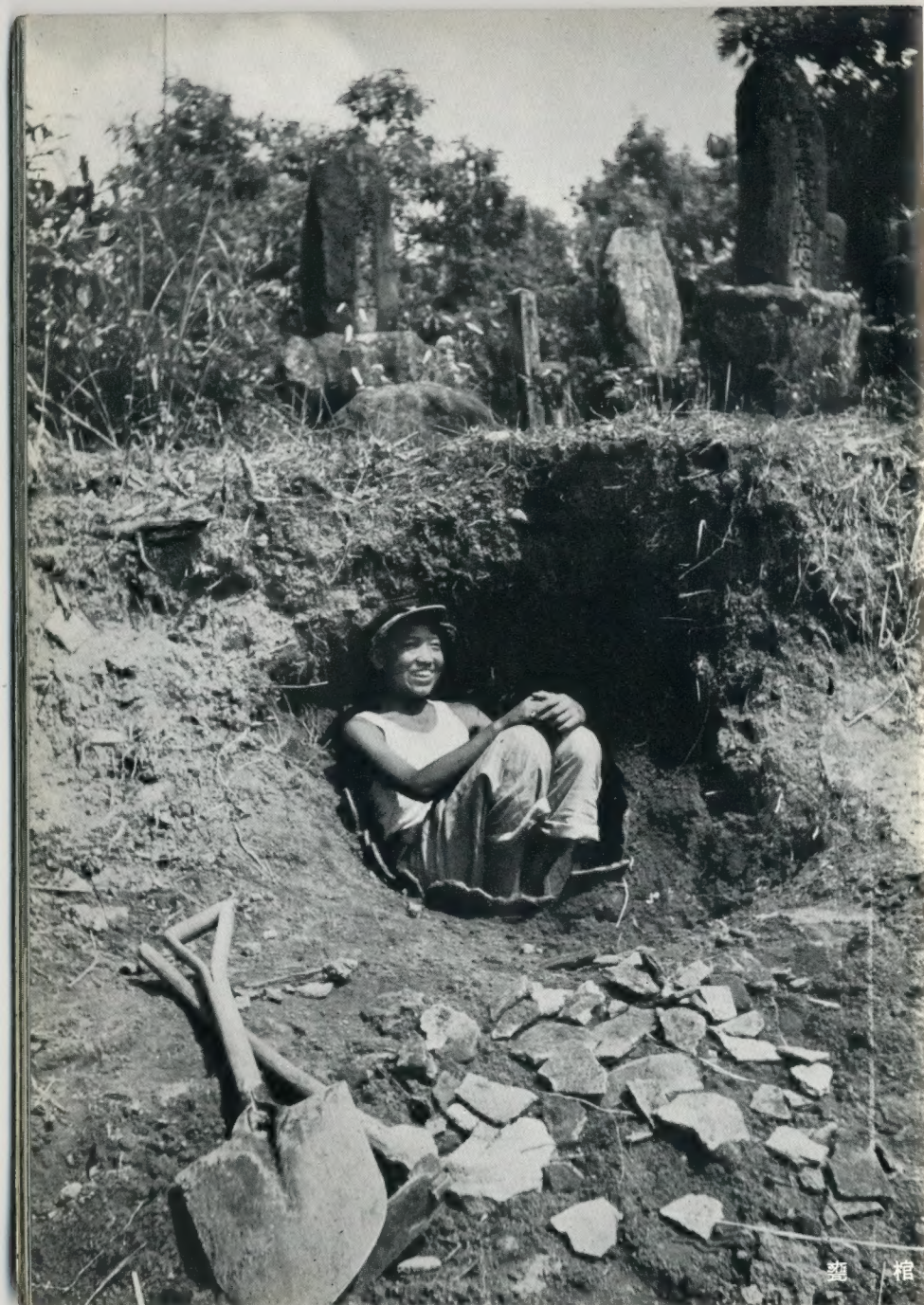
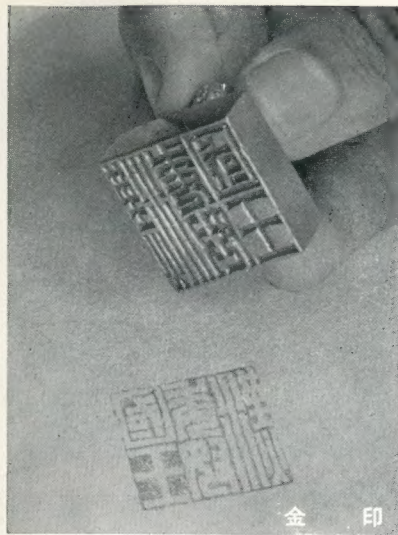
上，下ともに6枚の写眞をはりあわせたもの．

甕　棺

管　玉

北九州の彌生式文化は甕棺文化とよばれる．道路工事中に，ある墓地の下で発見された甕棺．二つの甕を合せてその中に死体を入れて葬った．博多湾沿岸にはこの埋葬法の遺跡が共同墓地のように群れをなしている．死体にそえて葬った副葬品は貴重な資料だ．

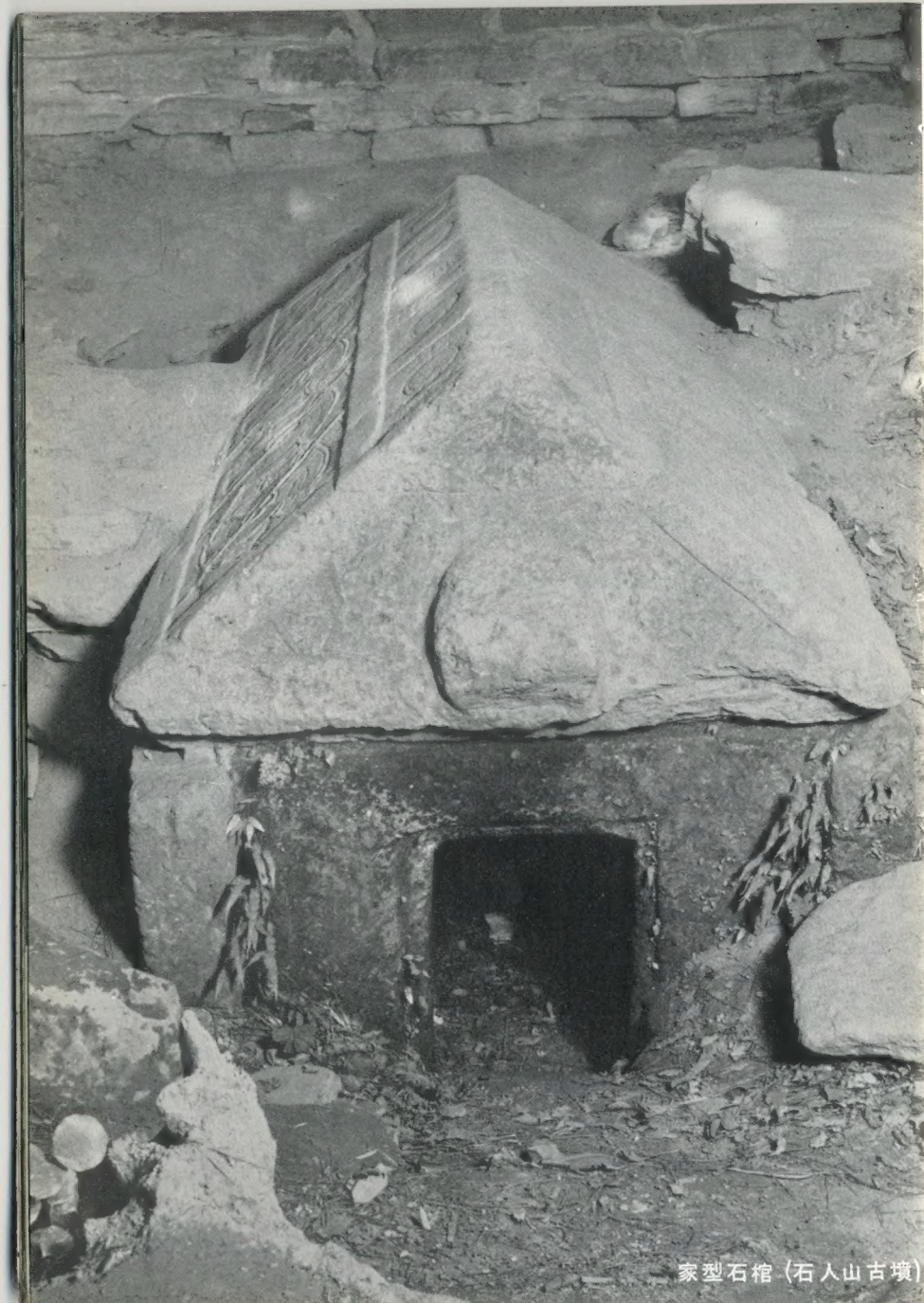
怡土村における甕棺の発掘

新文化のおとずれと日本の黎明

筑紫平野のまわりにある山のすそ、沼や川のほとり、それらのところどころから石のヤジリや石のモリ、縄目模様のある厚手な粘土の壺や鉢が掘りだされる。これらの石器や土器は今から三千年ほども昔、この地に芽生えた文化の遺物だといわれる。その頃の人々は美しい大自然の中に、山の幸、海の幸を追い求める、のどかな生活をしたかもしれぬ。大きな石ヤリや、鋭いヤジリをつけた矢束を手に、山のけものを追い、石のおもりをつけた網や、石のモリを肩に、魚や貝をもとめて海へ行く。この仕事は、おそらく、たくましい男たちの受持だったろう。また、女たちは、土を壺や鉢の形にこねあげて、貝殻を押しつけ、縄目のような模様を刻んでゆく。それは木の実を盛り、男たちの獲物を盛り、酒をみたしたのでもあろうか。しかし、こうした生活の喜びの中には、毎日自らの食物を追い求めねばならぬというなやみがあったろう。山や海の神々がいじわるい祟りをして、鳥や獣を山奥にかくし魚を岩かげにひそませる。地をゆり動かして焦熱の熔岩をはきだし、嵐をまきおこして流れの奔流をうずまかせる。飢と病と死が喜びを寸断し、おそろしいタブーが人々の一切を支配して、ただすがるものは、奇怪な呪法の儀式だったかもしれない。この時代の文化様式を、私たちはいま縄文式文化とよんでいる。

金印は北九州の先進的地位を物語っている.

約170年前，志賀島(しかのしま)の農民がふと掘りあてた一個の金印が，研究のすえ‘漢倭奴國王(かんのわのなのこくおう)’と解読され，中國の古い歴史に残る記録とてらしてこれこそAD57年後漢の帝から日本の一國王に與えられたものだと判明した.
1世紀初頭の中國の貨泉も彌生式中期の遺跡に発見され，彌生式の時代を明かにする.

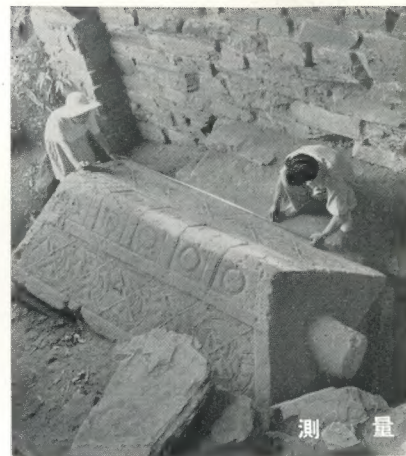
梅原末次氏提供

私たちのしるかぎりでの、もっとも古い先祖たちの社会は、こうした採集経済を土台にして築かれていた。朝働らきにでて、夜えものを手に帰る。そして次の日はまたその日の計画をたてる。すべてが一日を単位とし、將來の計もなく、海山の幸の不時の欠乏にそなえるゆとりもない。單純で貧しいくりかえしの毎日だけが、彼らのものだった。家がこわれればそこをゴミため(現在それは貝塚として残っている)にしてわきに移った。それも、わりあいたくさん樂にとれる貝類の多い水辺をはなれてはゆけなかった。狩に漁に、いかになかまの力を合せてみても、彼らのもつ道具そのものが、石や角や木でつくられたものでしかないのだから、後の世の分業のような生産力の増大をもたらすことはできない。こうした社会は千年も二千年もつづいたらしい。わずかずつの進歩として、例えば森の木の実を集落の近くにまいて、素朴な栽培を営なむというようなことがはじまっても、やはりその日ぐらしのワクはとれなかった。だが、ついに停滞をやぶり、新しい飛躍をうむ時が訪れてきた。それは、大陸からの水稲耕作や、金属器の渡來だった。しかし、思いきって田を切りひらき、小一年も先の収穫を、不安な氣持で待つ新農業法をとり入れるかどうか。それは決心のいることであったろう。狩や漁の氣樂さの中に、昔ながらの習慣をすてきれなかった種族もいた。たとえばエゾのなかまなどは、縄文式土器の中で、もっとも美しいものをつくる程の能力ももっていながら、大陸の文化に取り残されて、東の國へ追われてゆく。

志賀島・金印出土の地

採集経済を土台に生活を営なむ社会では、まだお互の身分の差や、貧富のちがいは現れていなかった。貝塚から出る彼らの死体をみても、装飾品や葬り方にちがいはみられない。狩や漁のリーダーも、自分だけの狩場や自分だけの舟はもたなかったし、集落の族長も、尊敬はされてもえものを多くぶんどる特権はもたなかった。えものや道具にゆとりもなかったのである。だからこの時代の社会は原始共同体とよばれる。ところが、しだいに採集経済がくずれて、社会生活が、長い見とおしの生産経済の上に築かれてゆくようになると、そこには今までなかった身分や財産のちがいが現れだしてきた。水稲耕作は、今までとはうって変った労働の仕方を必要とした。ことに灌漑にはたくさんの人と、智力がもとめられた。

そこで、集落を指揮する者も、かつての共同体の族長のように、皆と平等の権利しかもたないものでは、とてもやってゆけなくなる。祭りをつかさどるにしても、朝にその日の収穫をいのり、夕べにえものを分けあって感謝するだけではすまない。社会の長い運命を決すべく、ウラナイをたてる責任をもつのである。新しい権威が生れ、それを示すだけの威容もほしくなる。大陸から傳わった金属の剣や鉾は、支配力をしめすシムボルとなった。やがてすぐれた族長は、いくつかの氏族を統合して、小國家をつくり、氏族、奴隷をひきいる王となる。そうした社会のまず生れたのは、大陸に近い北九州であった。新しい社会制度は、また新しい文化を生んだ。かくて生れた新しい文化を彌生式文化という。

家型石棺（石人山古墳）

測量

装飾古墳は古墳時代の北九州を特色づける

古墳時代末期の家型石棺は，多く横口式の石室に発見される．墓を，死者の永遠のすみかとして美しくととのえる考え方を示す．屋根の上部に直弧文，下部に重圏文がほりつけられている，直弧文は上代人が好んで用いた文様だが，心なき人々の落書で，美しさがすっかりこわされているのは惜しい．古墳の副葬品．ともに金でつくられている．

金環と耳飾

都府楼址礎石

紀元前三、四世紀以來、大陸には、大きなうごきがおこっていた。それは漢民族のいちじるしい發展であり、朝鮮にもその勢力が及んだ。北九州に稲作や金属器が渡ったのも、その大きなうごきの影響であったろう。後漢書には「光武帝の代に、倭國が入朝した。帝はこれに印綬を下賜された」という記事がある。この記事はその實物の「金印」が發見されたことによって証明された。日本の記録はないが、西暦紀元前後の何世紀かのあいだ日本の先進的な地域であった北九州に、現在の村ほどの地域を單位にした小國家が群立し、さらに一人の長を奉じていた狀態、すなわち支配階級が発生しつつあったことが十分に考えられる。同じ様式の甕棺に葬られた人人の中にも、大陸傳來の貴重な副葬品をそえて埋められた者と、まったく何もない者が現われる。また副葬品を有する墳墓は多数の墳墓の中でも、まれに見られるものである。さらに三種の神器を聯想させる鏡や劍や玉など莫大な副葬品をもった甕棺もいくつか現われている。たとえば三雲、須玖、井原などのかめ棺がそれである。この墳墓の主こそ金印を與えられた王、又はその子孫であったろう。またこれこそ太陽の子をもって任じた人たちでもあったろう。

戰爭中に、唐津市櫻馬場の民家で、防空壕を作ったとき、偶然に大きな甕棺を掘りあてたことがある。それは口と口とをあわせて、東枕に埋葬されていたが、その中に、大陸傳來の鏡や鉄刀やガラス玉などとともに、釣針型の突起のついた異様な腕輪、クモヒトデを思わせる銅器（28、9頁參照）が

鬼　瓦

都府楼は古い日本の門戸を監督した太宰府の正廳である．そのおもかげをわずかにつたえる36個の礎石は東西 29 m，南北 14 m の土壇の上に整然とならび，それぞれが二重三重に円柱座の造出しをもっている．太宰府のもっともさかえた奈良朝時代の鬼瓦は，直経 2m もある．最近古代の狀態を正確にしるための精密な測量がおこなわれた．

三角測量

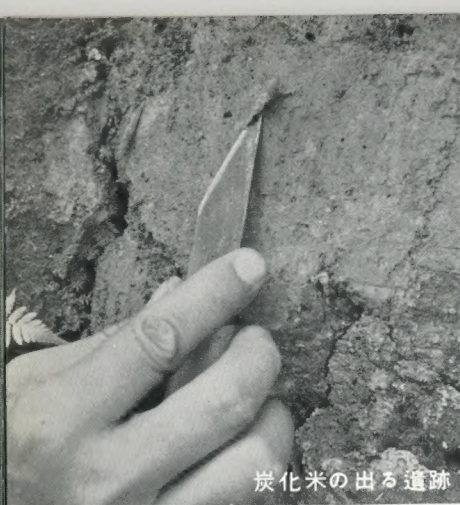
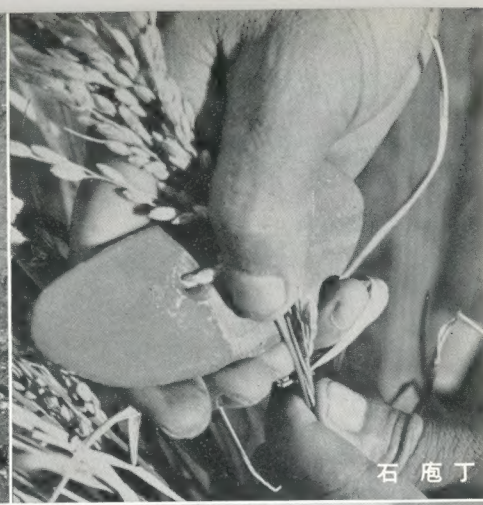
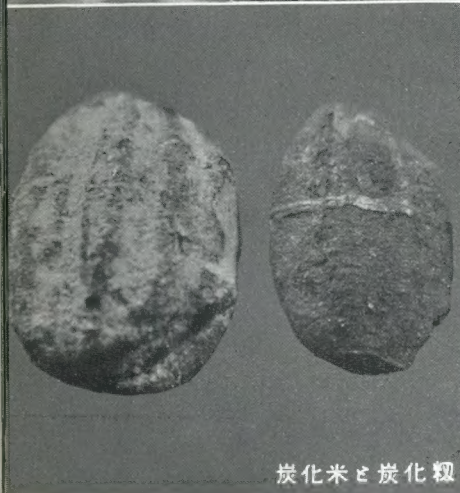
稲作の起源

原始時代の日本に，劃期的な進歩のきっかけを與えたのは，大陸からの稲作農業と金属の道具との渡來であった．いまもなお，機械化の進まない日本の農業は，当時の技術の漸進の上に立っている．

石庖丁は，米の渡來とともに大陸から傳わった新式の農具で，稲の穗をつむのに使ったものと考えられる．飯塚市の近郊には，これの製造をしていた場所の遺跡が発見されその製品は，福岡縣全体から佐賀縣の一部にまで，分布しているのが分った．

彌生式土器をつかった時代，すなわち稲作の行われた時代であることを証明する籾のあと．土器をつくる粘土にまじっていたものか，土器をつくりあげ乾燥中，そこについたものかの痕跡であろう．

竪穴住居があったともいわれる台地から炭化した米つぶが発見された．竹べらでけずりとり，洗ってみると，米(右)籾(左)に，アワがまじっていた．

筑紫平野の農村

炭化米の出る遺跡

石庖丁

炭化米と炭化籾

土器の底に残る籾痕

伴出した。このような銅器は巴型銅器とよばれている。彌生式遺跡から、鏡や剣がでることはさして珍らしいことではないが、巴型銅器が発見されるということは、考古学的に見て興味あることである。ある学者の推定によるとこれは当時傳來された白銅鏡の背面模様から構成されたもので太陽を象徴するバッジであるといわれている。もしそうならば、すでに二千年前の北九州彌生式文化の時代に天子とか、太陽の子とかいう思想の芽生えが、ようやく具体化しつつあったのではないかとも考えられるのである。

井原の墳墓からも二十一面の鏡や鉄刀、剣に伴って大形の巴型銅器三個が伴出したと傳えられている。當時、めぐまれた地理條件は北九州の地に農業を発達させ、農業によって生じた余剰を基礎にして、経済も文化もめざましく発展

貝　　　塚

原始時代の漁業は，すでに，現在みられる地引網などの，もととなる方法にまで，達していた．貝塚から発掘されるものが，その事実を証明している．

今津の長浜貝塚は比較的少ない彌生式時代のもので砂丘上に約20mの間隔で点在している．ここから発見されたものには，石斧，石錘，土錘，紡錘車，貝輪の破片などのほか，鯨の骨でつくった器物もあり，当時すでに共同作業による漁業や加工が存在したことを物語る．

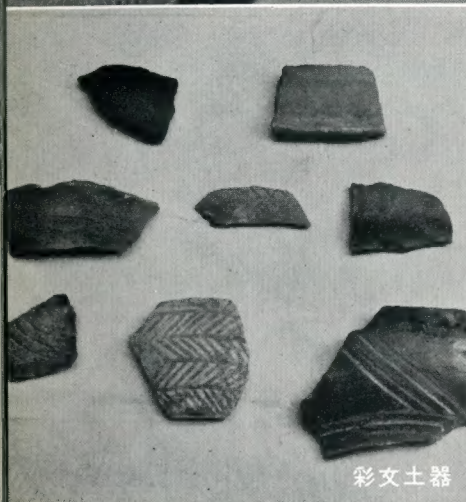
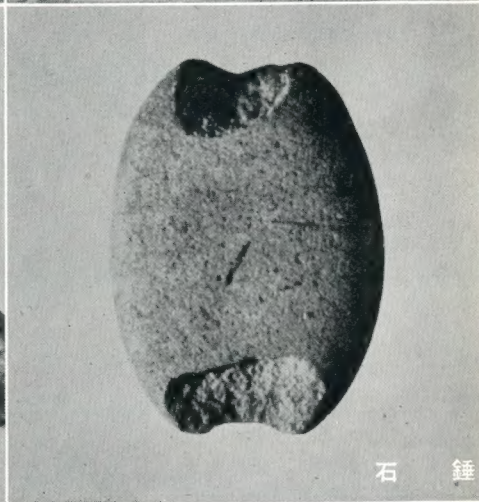
土器の文様も貝をつかってつけられたものがある．

今津貝塚発見の彩文(さいもん)土器．黒(煤)，朱(酸化鉄)，小豆，白の四色がみられる．

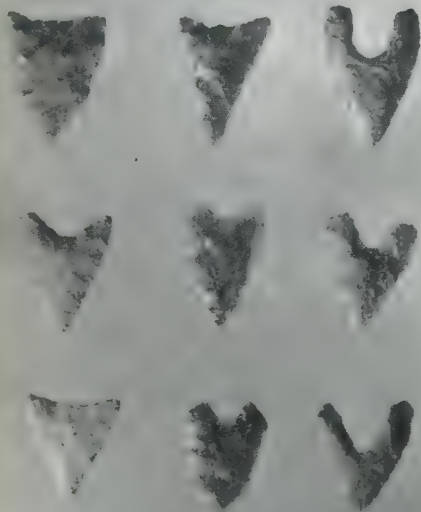
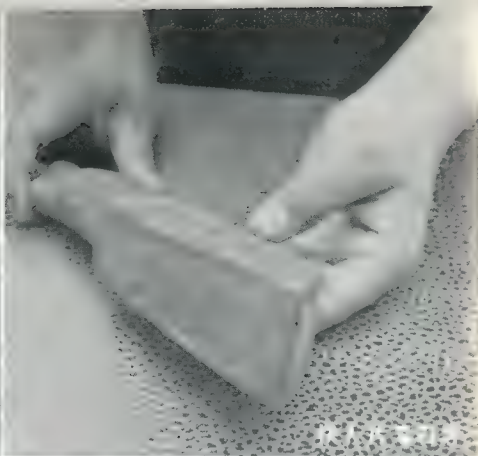
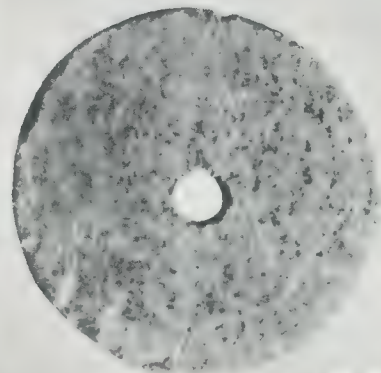
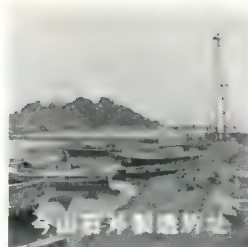
彌生式時代の石錘は，すりへった河原石の両端をかいて紐をかけやすくするか，孔や溝をうがって紐をつけたもの　大形の網が使われたことが分る．

残の島の漁村

貝殼條痕文

今津貝塚

彩文土器

石　錘

していったであろう。漢の皇帝が外蕃に与えたものは蛇鈕の銅印であるがその例を破って諸王侯と同等の金印を与えて奴國王を優遇したのも太陽の子と称した奴國王の実力が認められたからであろう。この時代、大和地方に國家が成立していたことを証明するような彌生式時代の遺蹟、遺物はまだ発見されない。それから見ると、北九州の原始國家は大和國家の先駆をなしたものと想像される。奴國には、その頃すでに銅器の多量生産が行われ、また流通経済も、日本全國にさきがけて芽を出しかけていた。博多湾を中心とする石製鎔範による廣鋒銅鉾や廣鋒銅戈の鑄造、今山の石斧製造所、立岩の石庖丁の製造所から出た石器の分布がそれを物語る。その石器の分布もかなりの拡がりを持っているが、青銅器は四國をへて遠く近畿にまで達している。

石　器

金属器はその渡來後も生産力の貧しさから，一般生産用には普及せず金石併用状態となり，石器は主たる生産手段として残り，独自の発達もあった．

↑→

北九州の彌生式遺跡に多く発見される石斧．今山に製造所の跡がある．製品は福岡縣東端から佐賀縣にまで分布され，上から順に製造過程をしめす．

←

彌生式時代の肉厚で，えぐりをもつ抉入片刃石斧．

←

大陸の銅戈をまねた石孔に紐を通し，柄をつけて武器としたものらしい．

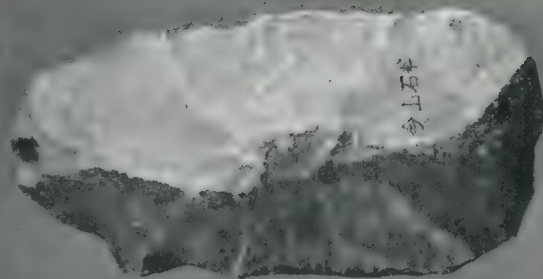
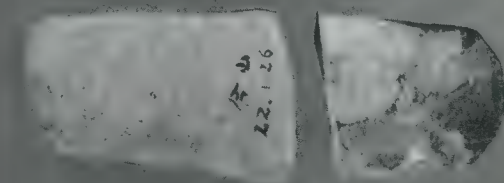
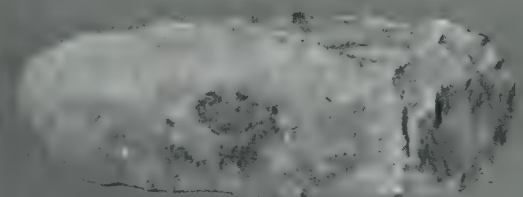
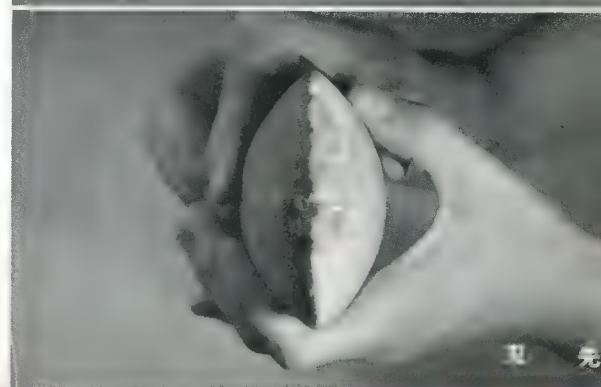
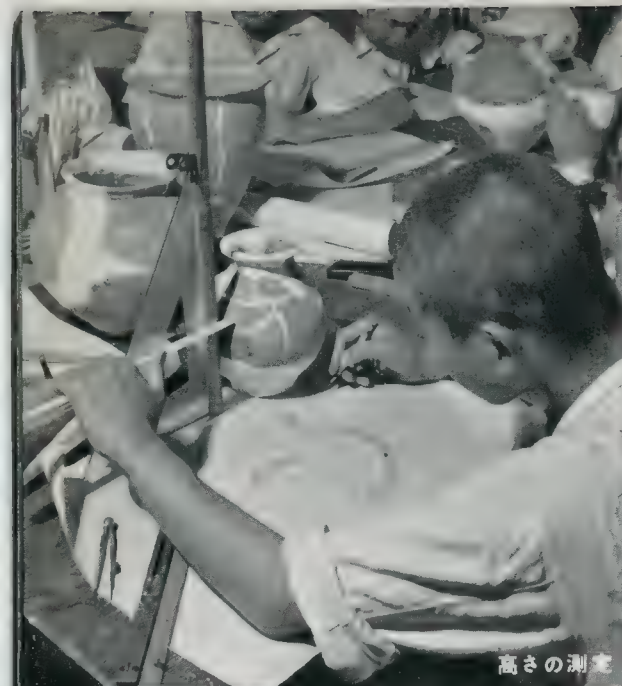
←

紡錘車．同じ型のものが未開人の紡糸につかわれているのでこの名がある．

←

有柄銅剣をまねた石剣．

←

縄文式時代から狩猟に用いた石鏃（やじり）．黒耀石のものが，とうとばれたらしい．

高さの測定

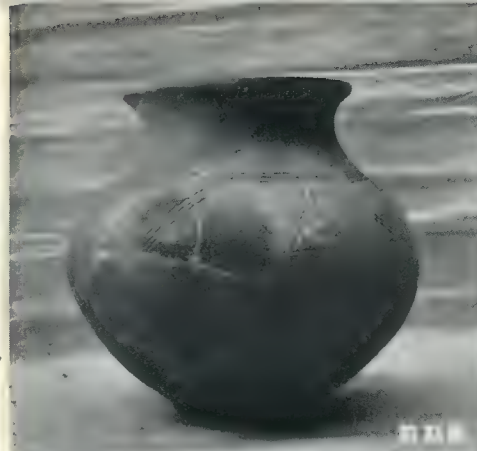
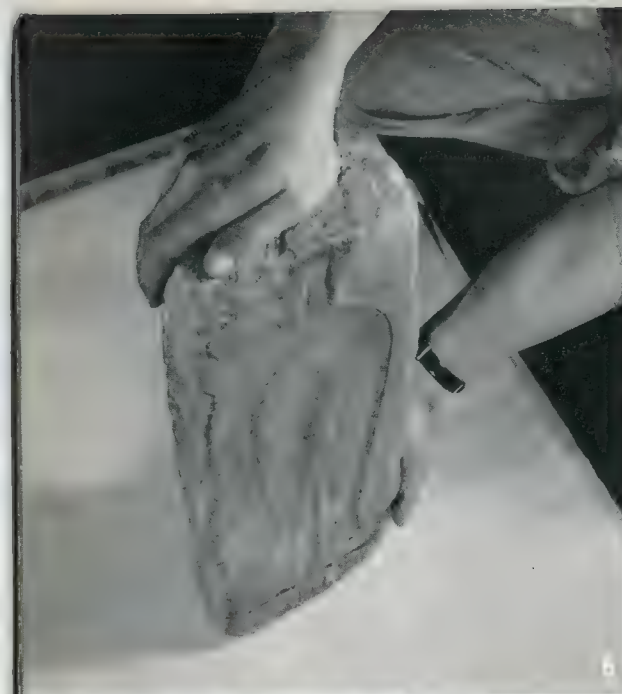
彌 生 式 土 器

この時代の土器は，まだロクロの発明以前で，手でこねてつくったものだが，そのわりにととのっており，ゆがんだものは少い．地方，時代，社会の発達の状態により，形や文様はもちろん，出土状態や製作のしかたのちがいが多く，その比較研究から当時の社会の姿をしるてがかりが得られる．

↑ 不完全な出土品も，この測定によって全形をしる．

→ 遠賀川式とよばれる前期のものは，口縁部がそりかえり，縁に刻み目があり，上部にヘラ描き（が）や彩文の模様がある．中期になると，口縁はT字型で表面に突起帯があり，無文．もっとも実用的な形．後期は口縁が‘く’の字型で，年代が降ると丸底に近づく．櫛目文もある

前期

中期

青銅器と祭祀用具

大陸からの金属器具の渡来は，その鋭利さに対する驚異から，神霊的な崇拜の対象となった．鑄型を用いて鉾や戈をつくる技術の遺跡は，北九州にかぎって発見されるが製品はひろく分布している．

2） 狭鋒銅鉾(せまざきどうほこ)は，大陸からの渡来品て，鋒は鋭どく，その下端に柄をはめて，槍にしたものらしい．

1） 廣鋒銅鉾はその日本化を示し，形は大きいが，つくりは素朴て鋭くない．

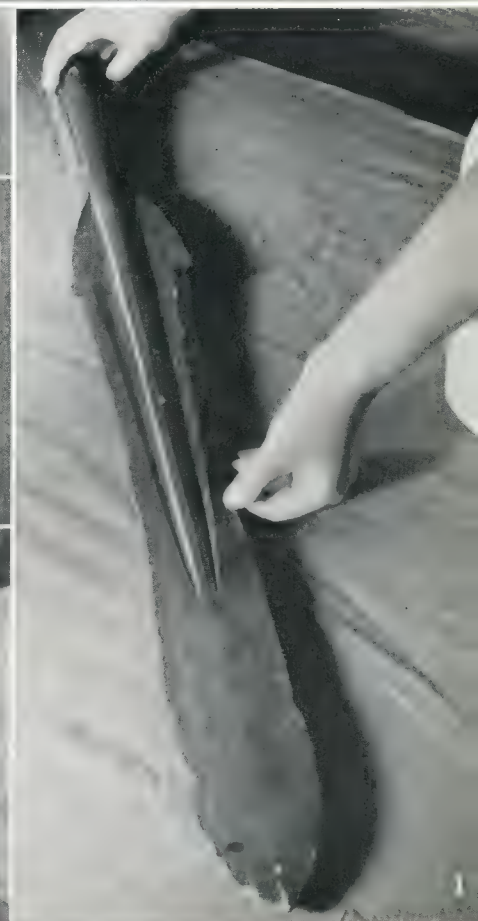
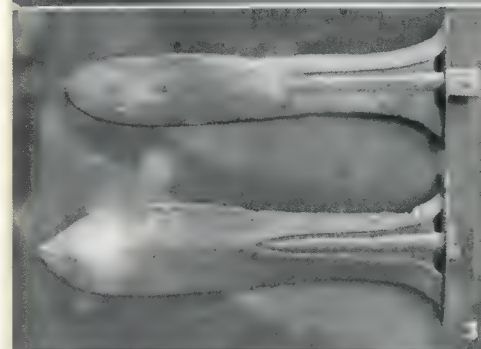
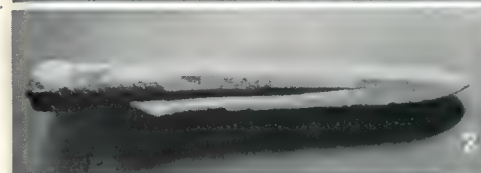
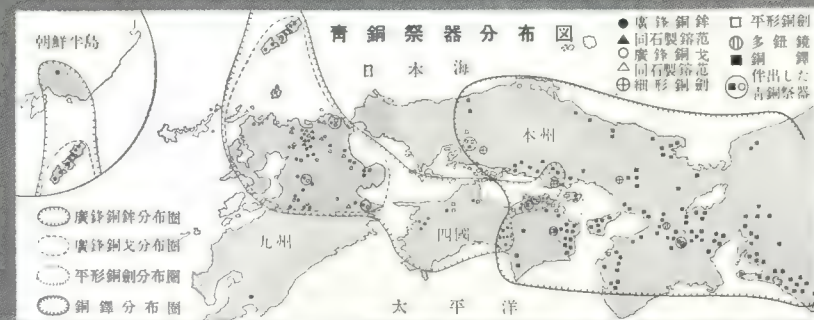
3）4） 狭鋒銅戈(どうか)と廣鋒銅戈も同様，前者は渡来品後者は日本産て，もっぱら祭祀用品として，大量につくられたものである．

5） 広鋒銅戈出土の遺跡．

6） 広鋒銅戈を造る鋳型．

7） 御床松原(みとこまつばら)の土偶．彌生式時代の祭祀用品らしい．

支石墓側面

ガラス製勾玉

原　始　墳　墓

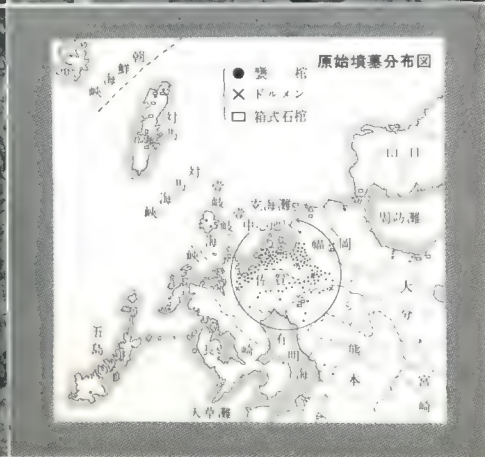
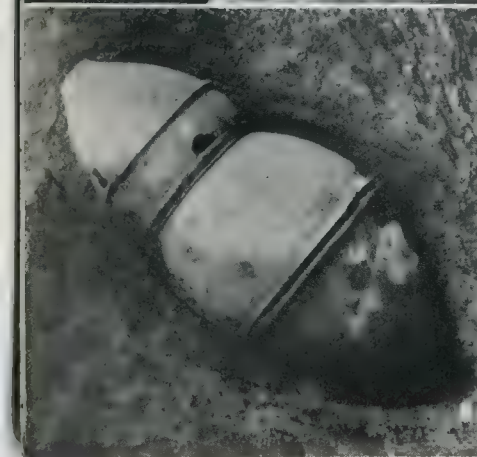
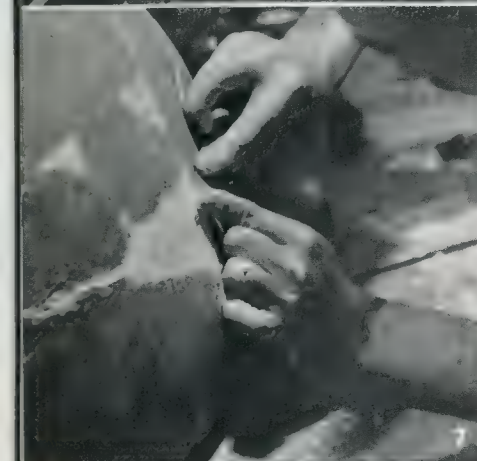
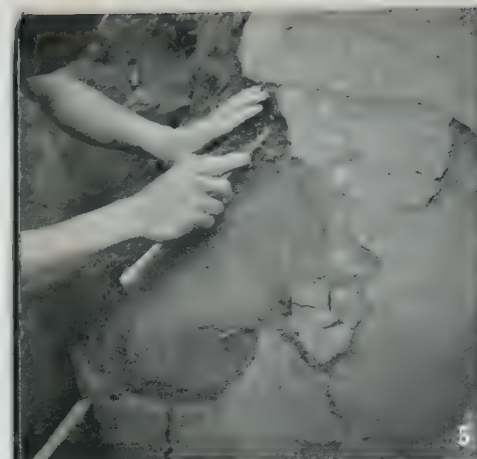
支石墓(しせきぼ)は，新石器時代の巨石文化のなごりて，上を一個の巨石でおおった墳墓であるが，日本では北九州にごく稀にその模倣が存在するにすぎない．

➡
この例では花崗岩の巨石の下が竪穴式石室になってそこに甕棺が埋葬され夫婦の墓かともいわれる．

副葬品の代表的なものは剣，鏡，玉て，舶来品の多いそれらと共に埋葬されることは権力の保持を示した．‘三種の神器’の神話もこういう事実から生まれたものと思われる．

⬆
三雲の甕棺の外部から発見された．鋒の鋭い漆黒色の優秀品．有柄が特徴．

⬆
前漢代の舶来品で剣とともに博多の聖福寺にある．

⬅
ガラス製．長さ約4 cm.

原　始　墳　墓

1）前頁の石ヵ崎支石墓をかこむ共同墓地から発掘された甕棺で，上におかれた石は，死者にとりついた魔物がふたたび立ち現れないようにと屍の胸をおさえて葬ったもの．

原田大六氏提供

2）甕棺中にあった人骨．

浮羽高校提供

3）今宿の砂浜から出た．

4）5）発掘にあたってはまず露頭している破片を追い，一部分が現れてくると埋っている方向がわかる．下の方が先に出た時はうずめて上の土を落し全体の形を出してゆく．

6）7）甕棺を復元．破片を，カゼイン糊で接合し，不足した部分を石膏でうめる．一個の土器を復元すると，同種の文様の破片から，その全体がすぐに推定される便が生れる．

8）須玖で出土した甕棺．

九州考古學會提供

舞鶴公園より東唐津を望む

大和國家の成立

唐津港

彌生式文化の遺跡は、その初期のものが、北九州から伊勢湾の辺まで、おびただしく発掘される。青銅器を使い、水稲を耕作するこの新しい文化は、めざましく早い速度でひろまったらしい。西日本は、こうした彌生式文化が最初に栄えた所であるが、その前時代の繩文式文化の遺跡はごく少ない。この点は関東、東北地方とまさに対比的である。西日本の先進性は、博多湾と唐津湾を結ぶ地方を中心に、合せ甕棺に埋められた人々によって代表される。金属器を大陸から國土に傳え、これを私有したり製作するまでにしたのはこの人々である。大陸、半島に比べて文化程度のごく低かった彼らは、当時どのような苦心をして玄海の荒波をわけ、貴重な青銅の鏡や劍や鉄刀などを傳え、鉾や戈などを造る技術をうけ入れたか。北九州の彌生式文化を銅劍銅鉾の文化と呼ぶのは意味あることと思う。これに対して、近畿地方のそれを銅鐸文化と呼んでいる。中國の鐃の形をまねて作ったとも、南方にその原型があるともいわれる。銅鐸

は近畿地方のあちこちから発掘されて日本黎明期の考証に貴重な役割を果しているが、その分布は、九州の銅劍、銅鉾に比べれば散在的であり、従って銅鐸文化は銅劍銅鉾文化のように、確然とした中心がないともいえよう。

また大和地方では彌生式時代の遺蹟から漢式鏡は発見されていない。すなわち、大陸文化の吸收によって彌生式文化をうちたてた先進地の名は、北九州に與えられなくてはならぬ。

中國三世紀の書物「魏志」には、とくに倭人傳の一章があって國名として奴、伊都、末盧、不彌などが記載されている。これは、それぞれ北九州の先的進な地方であった儺（博多附近）怡土（博多唐津の中間）末浦（唐津附近）穂波（飯塚附近）などにあてはめられる。また、それを統一していたという女王卑彌乎についても、次のように記されている。

「マジナイに長じた巫女のような女性で年をとっても夫はなく、一人の弟が手助けして、國をお

志賀海神社

三世紀の倭國（北九州説）

さめていた。王になってからその姿を見たものもなく、ただ一人の男子だけが、卑彌乎に飲食物を運んだり、いろいろの用事を傳えるために出入りしていただけであった。宮殿はまことに立派な建物でまわりは城のように嚴重にかこいが設けられいつも、武器をもった兵士が守っていた。また二三八年に、使者を魏の國にさしつかわし、皇帝から親魏倭王とされて、数々の贈物を授けられた。

これらの記事を読みすすんでゆくと、卑彌乎は当時、倭の王として、堂々と魏の皇帝に使をだしていたことがわかる。この女王が都していた邪馬台國は、それが大和か北九州かということが、学者により一定しない。言いかえると、これまで北九州が日本の文化の中心であったのが、この頃から大和中心に移るのであり、北九州が先進性を失うのである。彌生式文化の後期から、古墳文化の前期への過渡時代に、鏡、劍、玉をシンボルとする大和地方中心の輝かしい文化が力強く展開しはじめる。その原因は何か。九州國家の大和への移動と考えて、神武天皇東征の神話を実在とする論と、大和のスメラミコトが北九州を征服したとする学説とを生じて、まだ議論が結着しない。それはともかく、古墳時代の北九州は、もう先進國でも國家としての中心地でもなく、大和朝廷の支配する一地方であったことは事実である。しかし、だからといって、北九州の文化が絶滅したのではない。北九州の原始墳墓にみられる文化は、古墳時代前期に引き続いている。古墳文化の前期は北九州では單に彌生式原始墳墓文化の外部構造の変化、盛土大古墳への移行、すなわち墳墓築造に要する勞働力の結集差にしか過ぎない、と考えられる。北九州の古墳時代は、すでに文化的に独自性を失った九州が大和に流行した墳墓形式をまねた時代ともいえる。

三世紀の倭國（大和説）

朝鮮鐘

北九州の歴史

政治

- 古代国家群 … 大和国家 … 古代天皇制

文化

- 弥生式文化（金石併用時代）
- 古墳文化
- 古代貴族文化（飛鳥、白鳳、天平）

A.D. 57

金印

管玉

勾玉

土偶

石斧

巴型銅器

細型銅剣

広鉾銅鉾

内行花文鏡

弥生式土器

軍印

A.D. 600

都府楼址礎石

観世音寺の鐘

水城の遺材

朝鮮

新羅　百済　高句麗

中国

漢　後漢　晋　三国　南北朝　隋　唐

おもなできごと（世界・日本）

- B.C. 146　カルタゴ亡びる
- B.C. 27　ローマ帝政始まる
- B.C. 4　キリスト生まる
- A.D. 57　奴国王金印を授かる
- A.D. 238　卑弥乎親魏倭王となる
- A.D. 375　ゲルマン民族の大移動
- A.D. 391　倭、百済、新羅を征服
- A.D. 400　好太王倭軍を撤退させる
- A.D. 538　百済から佛教つたわる
- A.D. 538　任那日本府滅亡
- A.D. 645　大化改新
- A.D. 663　白村江敗戦
- A.D. 710　平城京遷都
- A.D. 752　大佛開眼

石製狛犬

住吉神社は，志賀海神社，宗像(むなかた)神社とともに，北九州にある最も古い神社である．いわゆる神功皇后の三韓征伐の時，皇后にしばしばお告げを下してその渡海を守ったと傳えられ，古くから博多に社があった．海上守護の神として，他の港にも祀られている．この地の現存の本殿は，黒田長政が徳川初期に再建したもので，住吉造りという．

滑石製舟模型

住吉神社

宗像神社

宗像神社は，辺津宮(田島)，中津宮(大島)，奥津宮(沖島)にわかれ，古來交通の神としてあがめられ，宝物として大陸からの渡來品，交通にゆかりのある奉納品が多く蔵せられている．鎌倉時代の文書によると，芦屋から宮地のあたりで難船した舟は，ここの財産となった．古い時代に，この神社の勢力が强かった事実を物語るものであろう．

有明海文化

彌生式文化の時代には、博多湾から唐津湾をむすぶ地域が原始墳墓の中心地域をなしていた。この時代に北九州の周辺地区に甕棺と対比的に現われた箱式石棺がある。この箱式石棺が古墳時代甕棺に代って博多湾附近にもあらわれる。またこれに併行して近畿の墳墓形式である高塚にまねた前方後円墳や円墳が地方豪族の墓として築造された。その分布は甕棺のそれとほぼ同じである。この時代に、玄海灘に面し、筑紫山脈にかぎられた土地は、大和朝廷の朝鮮半島への進出の根拠地であったが何しろ大和と北九州は遠隔である。大和朝廷の眼をかすめてひそかに勢力を張る者を生んだ。また玄海灘に面しない地方、筑後川流域から熊本の方面にかけて大和文化とは違った特殊な文化発展がみられた。それを有明海文化という。近畿地方の埴輪(はにわ)を石に代えて大形にした

岩戸山古墳石馬

石人，石馬は，九州地方の古墳時代を特長づけるもの．円墳の頂上や前方後円墳のくびれ目などに立てられたものらしい．人や馬を形どったものの他に武器類の形もあり，凝灰岩でつくられている．埴輪(はにわ)円筒は古墳の周囲にめぐらした土製品で，やはり装飾的効果をもったものらしい．鏡や玉をかたどった土製祭祀品も古墳時代のもの．

埴輪円筒

九州考古学会提供

石人山古墳石人

梅原末治氏提供

石人、石馬をたてた大古墳など、大和にはないものの一つであるが横穴式石室に描いた装飾古墳の発達も特長的である。とくに装飾古墳は、他地方ではみられない立派なものが造られた。しかし、その装飾をしらべると、朝鮮の高句麗からわたった流麗な文様に学んで稚拙な模倣がされている（40ページ参照）。おそらくこの時代に有明海地方の豪族は朝鮮と私的な取引をしたものであったろう。

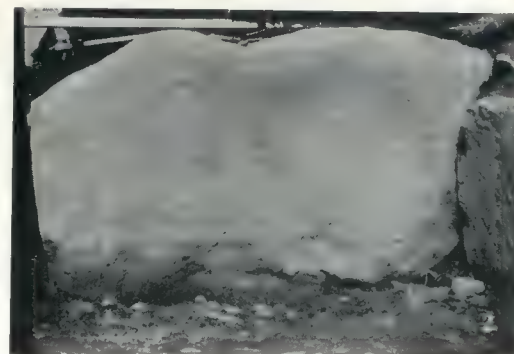
神話に出て来る大和朝廷の度々の熊襲征伐は新興勢力たるこれら豪族に対して服属を要求したことを傳えたものと思われる。「筑後風土記拾遺」には、後に朝鮮の支援をたのみにして大和朝廷に反逆し、事成らずして亡ぼされた筑紫の君磐井が生前に建てた墓のことを書いてある。その墓は石人や石盾を立てめぐらした壮大なもので、今残る岩戸山、あるいは石人山前方後円墳のいずれかであろうとされる。熊襲平定の最後を飾るものである。現在、この地方に、人形原という地名が残っているのは当時のすがたが、傳えられたものであるともいわれている。

桂川町王塚古墳．装飾古墳中の白眉ともいうべきもの．主室奥の棺床はダブルベッド．前室の主室に通じる入口には両側に馬の壁画がある．副葬品の雲珠，杏葉は馬を飾る金具．梅雨時にここを訪れたら，保存が不完全のためか水がたまって汲み上げていた．

石室内部

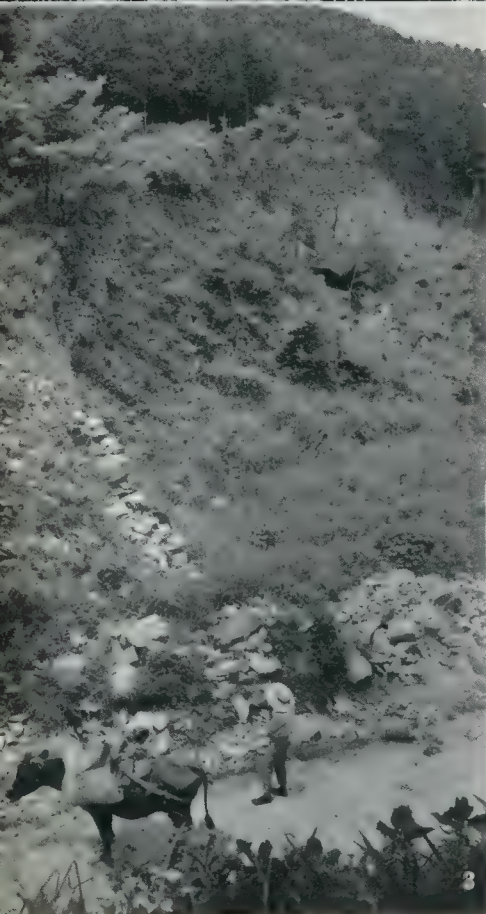
3) 朝鮮真坡里古墳壁画.
4) 舟型石棺も，舟の壁画と同じ思想にもとづいてつくられた．近畿に多く，九州には例が少ない．
5) 箱式石棺は，彌生式時代から存在した最も古い形式．石室内のものでは底石のないのがおおい．

梅原末次氏提供

1) 王塚古墳壁画．石室壁画も満洲，朝鮮の墳墓様式の模倣．朱と黒でえがいた馬は，石馬と同様，亡き主人に仕えさせようとしたもの．周囲の模様は唐草文をまねた蕨手文．
2) 珍敷塚古墳壁画．舟の壁画は，海のかなたと考えられた死の國へ，故人を運ぶ考えにもとづく

科学朝日提供

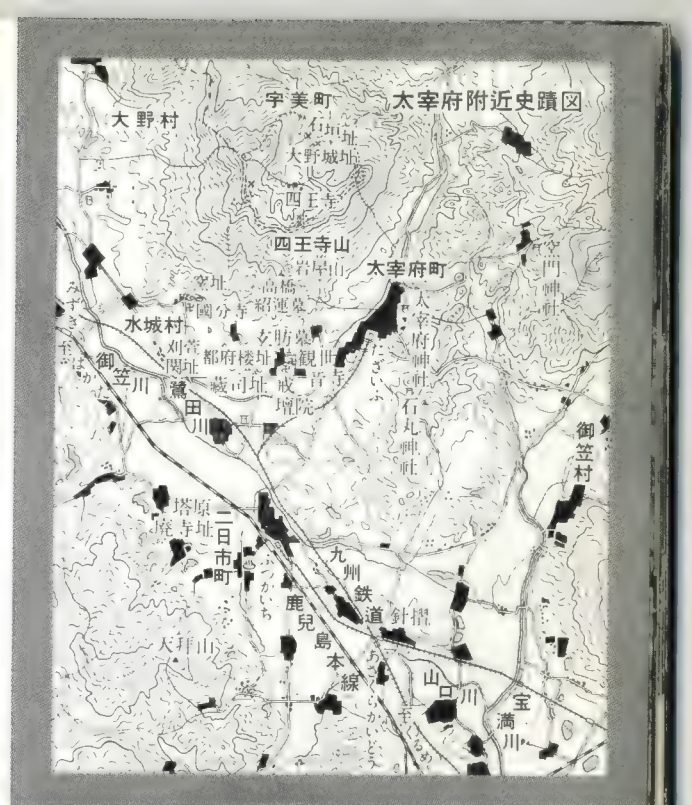
いま宮地岳神社の奥の院になっている宮地岳中腹の円墳は，巨石でつくった堂々たる横穴式の石室をもち，古墳時代末期の代表的なものである．この山の北麓には，前方後円墳をもふくむ古墳群があり，いずれも，この地方の豪族の墓と思われる大和地方に始まった神社の様式はもともと前方後円墳を形どったものとされるが，諸所の古墳がそのまま神社になって残るのも故あることであろう．

1） 巨石にかこまれた古墳内部．2） 最奥の石室 3） 今も金色まばゆい副葬品の壺鐙．細長い袋状で，つり手に接して文様をうきだす．同型式の鐙は，正倉院，法隆寺にも傳えられている．4） 同じく副葬品の馬具．5）神社の拜殿入口．6） 岩屋不動の旗のある古墳入口

便利堂提供

1） 北九州特有の上代文化遺跡に，神籠石（こうご）がある．中でも名高いのは高良山（こうらさん）のそれで，方1m前後の角石の上辺をそろえて，一列に山腹をめぐらしている．山城（やましろ）だという説と神域をかぎる玉垣だという説とあるが，朝鮮式山城との関連が考えられる

2） 菅原道眞の流されていたという榎寺附近より四王寺山を望む．大野城はこの山にきずかれた城．

3） 大野城趾の百間石垣．天智天皇時代に百済人を使役して築城したという．

4） 三宅（みやけ）附近．大和朝廷が，非常にそなえて，常備米の倉，官家の備をおいたと傳えられる．後に設置される太宰府の前身．

太宰府の歴史

大和統一國家の発展にとって原動力の役目を果した大陸文化輸入の門戸である儺（な）の地方は対馬（つしま）、壹岐二島の飛石を前に國防上の第一線でもあった。また九州を中心とする西日本の政治、経済、軍事上の要点として、大和國家にとっての重要性が大きかった。ここに中央の强力な出先機関が置かれる必要があった。その前から大和朝廷の朝鮮進出が行われ、任那に日本府が置かれていたが、古墳時代後期に至って朝鮮の反抗強く、情勢悪化に伴って太宰府の歴史が西の鎭めの意義をになって浮び上った。

傳えられる筑紫の君磐井の乱（五二八年）は地方豪族が外國と連絡をとって、中央政府をうかがうものとして捨ててはおけず、五三六年那（な）の津の辺りを特に朝廷の直轄地とし、近畿地方其他から送る米穀を蓄えて変に備え、ついで筑紫の大君を駐在させたことが、日本書紀にみえている。太宰府の名称が正式に何年に定ったかは判明しないが、六〇九年推古帝の時代に筑紫太宰が派遣され、その役所を太宰府とよびだした起源を持つ。大化改新以後は、太宰府と近畿とを結ぶ駅路、駅馬、駅鈴などの設備をふやし、また太宰府と九州各地との連絡路の定めも確立した。太宰府の長官たる帥（そち）の名も、新しい律令國家の九州総督というほどの

大宮として文書に現われる。あたかもこの時代に、四世紀以來築いた南朝鮮の日本植民地が、唐、新羅の圧迫をうけるに至った。大化の改新を行ったばかりの中大兄皇子は、斉明天皇を奉じて那の津に出征し、長津の宮という行宮をもうけて督戦に当られた。ついで朝倉宮に移り、天皇の崩御にあって皇子は天智天皇としてここで即位してなお戦をつづけられたが、朝鮮白村江の大敗をきっかけに外征をやめ、残兵をひきいて東帰し、翌年早々、九州、壱岐、対馬に防ぎの兵（防人）をおき、危急の際は山上にノロシ（烽火）をあげる用意をし、さては水城を築くなど不安と緊張した情勢が続いた。太宰府も、それまで海岸近い所におかれていたのを内陸に移し、水城をはさんで大野、椽の二城が築かれ、つづいて海岸監視として三野、稲積の二城を追加して堅固な要塞と化した。その後、奈良朝に入り吉備眞備に西方の出城として怡土城を築かせ殆ど防備は完全に近かった。その後おそれをなした外寇もなく、唐との外交も復活して奈良朝に入ると、太宰府は平城京に次ぐ西の都と謳歌され「大君の遠のみかど」として栄え、唐からの使を送迎する鴻臚館は賑った。遣唐使は数百年來の大陸への航路を儺の津から出航し唐津を

水　城

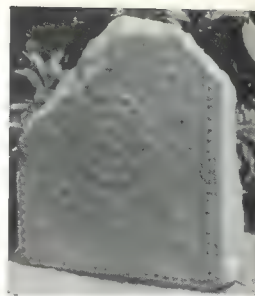
天智天皇の代に，白村江の戦で大敗した後，勢に乗じた敵軍の來寇を恐れ水城がつくられた．(664年)大宰府を防衛すべく，筑紫平野を横断して，東西丘陵をつらねた土堤で中央を，御笠川が貫流しいざとなれば水をみたして敵をはばむ計画だった．全長約1 km. 高さ14 m.
1）岩屋城から見た水城．3）水城の西堤．今は鉄道に横断されている．4）元祿年間に発掘された水城の木材．観世音寺に保存されている．2）水城関とよばれた関門の礎石．

離れて行った。奈良正倉院に傳えられる唐文化の遺物もこの津を一度経て平城京に運ばれたであろう。だが遠く関東からも徴集されてきた防人の悲歌や、度かさなる筑紫一帯の飢饉疫病などは太宰府繁栄の陰の悲劇を語っている。かくて唐の内乱につぐ遣唐使の廃止により進歩性は失われ、地方豪族の擡頭によって太宰府も弱体化し、九三九年藤原純友の乱に占領され焼失、一〇一九年刀伊賊の入寇には権帥藤原隆家が独力で対策をたてる状態を招き、「遠のみかど」の権威は次第に墜ちて行った。

都　府　楼

奈良朝，平安朝を通じて西の都を形づくった大宰府の都城は，今日の大宰府町の一部，水城村，二日市町の大半をふくみ規模宏大なものであった．

今，太宰府往還を途中で北折すると，約40mで大門跡の礎石をみいだす．そのさらに北30mに，中門跡の礎石，そこをすぎて約120mの所に正廰趾がある．正廰に向って左右には，東廰，西廰が建ち，正廰の後にはさらに後廰があったものという．

1） 正廰趾．造出しのある礎石の列．2） 礎石の残る史蹟地に，畑がつくられて，物議をかもした趾．3） 遠賀軍團印．当時めしだされ西の守りについた地方軍隊の印．この軍團は中央からの防人てはない．4） 都府楼より榎寺への道．5） 正廰趾．

太宰府附近

1) 都府楼趾の附近. このあたりをのぞんだ道眞の詩に‘都府楼はわずかに瓦色をみ, 観世音寺はただ鐘声をきく’とある.

2) 浄妙院ともよばれた榎寺. 道眞の配流のあと.

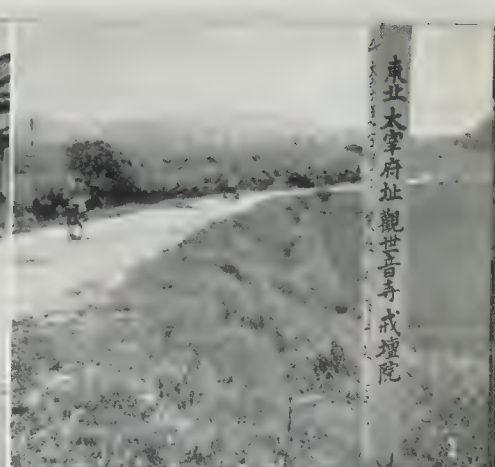
3) 僧玄昉墓と傳えられる. 聖武帝の愛臣であったが, 藤原廣嗣と対立し, 廣嗣は亡され, 玄昉も観世音寺に左遷され死んだ.

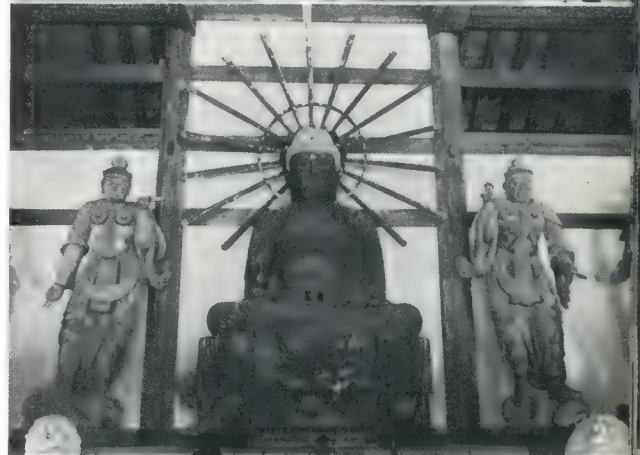
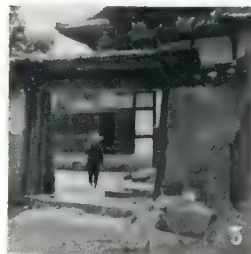
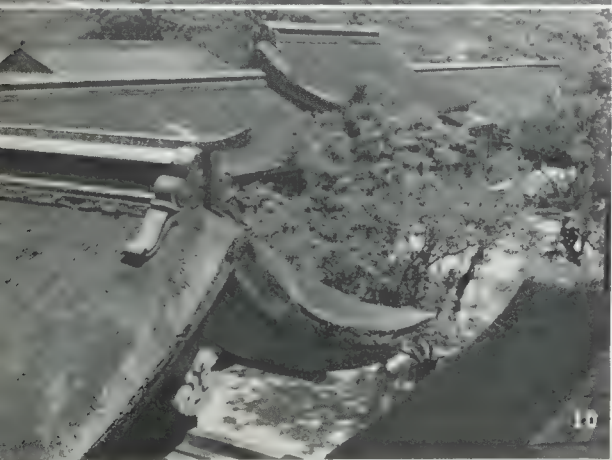
4) 観世音寺の附近の道.

5) 國分寺. 聖武帝が741年, 全國に設けた國分寺の一つで, 民衆の教化と社会事業を併せて行った.

6) 学業院. 玄昉とともに左遷された大学者吉備眞備の建てた学校である.

7) 学業院の趾から發掘されたというしきがわら.

8)9)10) 現在の大宰府町

観　世　音　寺

観世音寺は，太宰府が九州治世の中心であったのに対して，佛教の中心として建立され，東大寺に次ぐ大寺院といわれた．戒壇院は奈良の東大寺，下野の薬師寺とともに，天下の三戒壇といい，九州，西日本方面の僧侶はすべて，この寺の戒壇で授戒（僧になる式）をうけねばならぬ定めであった．
1) 2) 3)　観世音寺の佛像．伽藍はあれはてているが寺內には多くのすぐれた佛像がある．4)　銅鐘は創建当時のもの．5)　戒壇院の入口．6)　観世音寺の本堂．7)　戒壇院本堂．

太宰府神社

菅原道真は，当時勢力を伸していた藤原氏の長者時平との対立にやぶれてこの地に流されたのであるが，政治家，学者としては保守的で，大陸文化の積極的な攝取にも反対であった．死後天満天神として祭られたが，その廟のあった安樂寺は，中世を通じて勢力が大きく領地も諸國にまたがっていた．道眞の名が，学問の神として残ったこともそうした地方的な勢力の藤原氏の政治に対する批判や，一方中央政府側の昔の罪人に対する寛容の誇示といった政策にもとづいていたものであろう．

1）參道．2）志賀社．3）飛梅．4）心字池にかかる太鼓橋．6）樟．我が國第二の老樹．7）道眞が好んだというウソの玩具．8）本殿．9）廻廊．10）楼門より廻廊を望む．

港

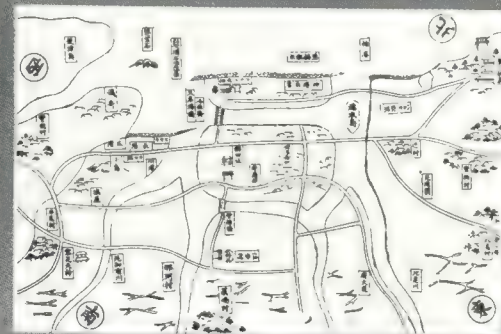
1）万葉時代から荒津(あらつ)港とよばれた福岡港. 2）現在の博多港. 博多は太宰府の設置当時から, その外港として栄え, 唐, 新羅と交通, 貿易する者がすべてこの地に泊ったし外國商人の往來もさかんであった. 江戸時代になると, 博多は商人の街, 福岡は武士の町と, 異った道を歩むようになった.

3)4)6）万葉集にも 筑紫(つくしの)館(やかた)の名で外國人の迎賓館が歌われているが, 平安朝になると鴻臚(こうろ)館の名でよばれ, 大陸半島の役人商人がたえずここに訪れ宿泊, 交易した. ここにも礎石が発掘されている.

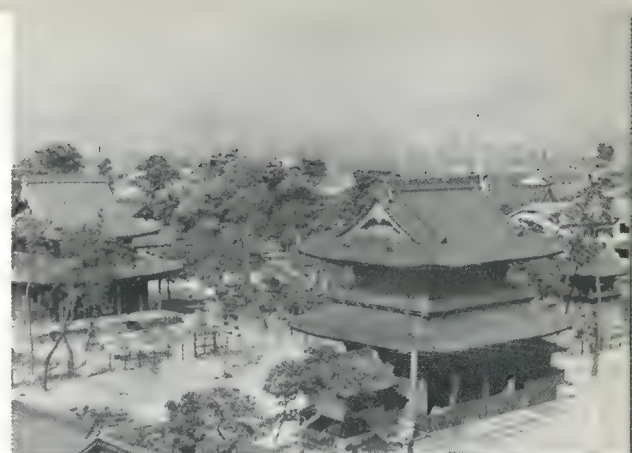
5）大濠(おおぼり)公園. 今では濠となっているが, 昔は荒津港の入江であった. 7）昔の袖(そで)の湊があった新博多駅の附近. 対唐貿易時代は, それ以前の港である荒津から, ここに埠頭が移動して, 唐船はもっぱら, 袖の湊へ入ってきた. 沖の浜なる出島との間が天然の良港であった.

禪宗の傳來

博多は古くから唐に渡る留学僧の出入港で，鎌倉時代に，宋から，禪宗が入ってくるとまず博多を中心に，聖福寺，崇福寺，承天寺などの禪刹が建立された．聖福寺は，栄西が頼朝に願い出て，もと宋人によって建てられたと傳えられる百堂のあとに建立したもので，後鳥羽院から‘扶桑最初禪窟’の勅額をたまわった．新しい商品も禪宗とともに，宋から渡來してきた．

1）聖福寺．2）今津大泉坊の宝篋印塔．大陸からの輸入品．3）四王寺の経筒．4）宗像神社に残る阿彌陀経石．5）博多の東光院本尊，藥師如來．

元寇

鎌倉幕府が，新しい封建制度を創始して武士階級の意氣大いに上ったと見えたのもつかの間，新政治の破綻があらわれた頃小さい日本に想像もできなかった攻撃がかかってきた．それが元寇であった．宮廷貴族は，ただ祈禱にすがるばかりであったが，北條時宗に指導された武士の防戰は，蒙古軍の海戰に対する知識の欠如をついて，成功した．國難克服をいのった日蓮も，当時，貧困にくるしみだしていた下級武士に多かった信者を，防戰に組織して，功績をあげた．

6）日蓮銅像．7）今津の砂浜に残る元寇防壘．8）敵國降伏を祈った箱崎宮．

1）名護屋城趾．3）城趾より壹岐，対馬をのぞむ．1587（天正15）年，九州を自己の勢力におさめた秀吉は，博多の重要性に注目し，南蛮船に乗って博多を視察し，都市計画をたてて当時さびれていた町を復興し，商港，商人の保護を宣言した．秀吉が，名護屋城をきずいて，朝鮮出兵の本拠としたのは，この後である

2）福岡城趾．はじめ秀吉が，博多に封じた小早川氏は，ここを，商港として利用する方がよいと考えて，城を築かなかったが，後，黒田氏が入國して，福岡城をきずいた．

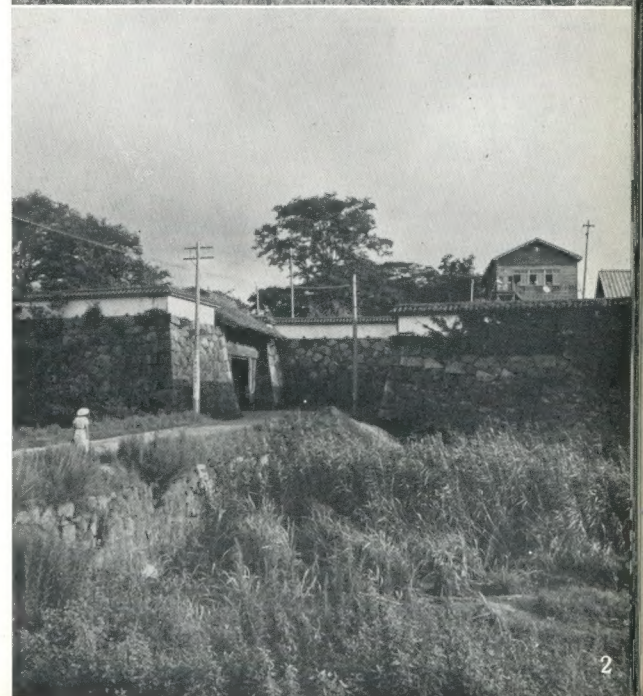
4）高取燒．5）芦屋釜．6）7）唐津燒．高取燒は，黒田長政が征韓の後，韓人の技術者をつれ帰って，高取の地で，製陶に従事させたのがはじまりて，その後も，藩の事業として，市内皿山一帶に場所をうつした．唐津燒，芦屋釜なども，昔から名のある名産で，封建末期から，はやく工場制手工業化し，この地方の，封建支配をつきやぶる運動に，物質的基礎を与えた．

4

5

3

1

2

御朱印船貿易の時代には，秀吉の寵遇もうけ，博多織はじめ各種地方産業をひらくのにも功のあった，神屋宗湛などの博多商人が栄え，商港としての博多は，福岡城とならんで，その勢を誇った．その後，鎖國時代となり，貿易，文化の中心は長崎に移り商業地としての博多は一時おとろえ，封建制の法網をくぐる抜荷貿易が発覚した悲劇も多かった．幕末に近づくにつれ，各種産業の近代化しようとする勢いははげしくなった．黒田藩も，封建大名である一方，その土地がらにもとづいて，藩制改革，産業保護に乗りだしたが，博多織，陶器，生蠟，染料等の生産がます一方，封建制を守ろうとする矛盾も大きく，他方徳川時代を通じてこの地方には稀だった百姓一揆にもあって，藩論混乱のまま維新を迎えるに至った．明治初年福岡博多合併後は，城下町，問屋町，商家，名産加工，近代工業，港などの各種氣風の入り混った大都市を生んだが，近來はまた空港としての國際色も加えてきた．

1）　博多織．2）　博多人形．3）　博多山笠．4）玉屋デパート屋上からみた町，手前が博多．川向うが福岡．5）西公園からみた福岡．

岩波写真文庫目録

1 木綿　2 昆虫　3 南氷洋の捕鯨　4 魚の市場　5 アメリカ人　6 アメリカ　7 雪の結晶　8 写真　9 レンズ　10 紙　11 蝶の一生　12 鎌倉　13 心と顔　14 動物園のけもの　15 富士山　16 積雪　17 いかるがの里　18 鉄　19 川　20 雲　21 汽車　22 動物園の鳥　23 様式の歴史　24 銅山　25 スイス　26 スキー　27 京都　28 力と運動　29 アメリカの農業　30 アルプス　31 山の鳥　32 奈良の大佛　33 尾瀬

34 電話　35 野球の科学　36 星と宇宙　37 蚊の観察　38 長崎　39 高野山　40 正倉院（一）　41 彫刻　42 佛像　43 化学繊維　44 蛔虫　45 野の花　46 金印の出た土地　47 東京　48 馬　49 石炭　50 桂離宮と修学院　51 日光　52 醤油　53 文楽　54 水辺の鳥　55 米　56 正倉院（二）　57 石油　58 千代田城　59 歌舞伎　60 高山の花　61 波　62 京都御所と二條城　63 赤ちゃん　64 オーストラリア　65 ソヴェト連邦　66 能

67 造船　68 東京案内　69 平泉　70 手術　71 宮島　72 廣島　73 佐渡　74 比叡山　75 阿蘇　76 信貴山縁起絵巻　77 針葉樹　78 近代藝術　79 日本の民家　80 季節の魚　81 シャボテン　82 新劇　83 郵便切手　84 かいこの村　85 伊豆の漁村　86 奈良　87 奈良　88 ヒマラヤ　89 上高地　90 電力　91 松江　92 動物の表情　93 金沢　94 自動車の話　95 薬師寺・唐招提寺　96 日本の人形　97 システィナ礼拝堂　98 美人画　99 日本の貝殻

100 本の話　101 戦争と日本人　102 佐世保　103 ミケランジェロ　104 空からみた大阪　105 宗達　106 飛騨・高山　107 ゴッホ　108 京都案内　109 京都案内　110 雅楽　111 雛　112 東京湾　113 汽車の窓から　114 地図の知識　115 姫路　116 硫黄の話　117 伊勢　118 はきもの　119 隠岐　120 源氏物語絵巻　121 農村の婦人　122 出雲　123 アルミニウム　124 水害と日本人　125 日本のやきもの　126 貝の生態　127 イスラエル　128 伴大納言絵詞　129 瀬戸内海　130 飛鳥　131 聖母マリア　132 日本の映画

133 能登　134 山形県　135 福沢諭吉　136 利根川　137 鹿児島県　138 伊豆半島　139 日本の森林　140 高知県　141 チェーホフ　142 佛教美術　143 一年生　144 長野県　145 塩原　146 日本の庭園　147 木曾　148 忘れられた島　149 近東の旅　150 和歌山県　151 函館

新刊

152 豆　153 大分県　154 富士をめぐる　155 死都ポンペイ

近刊

神奈川県 —新風土記—
柔道
戦争と平和
ジョットー

B6判　64頁　写真平均 約200枚　定価 各 100円

博多港埠頭より町を望む